

渡辺一夫『フランス・ユマニズムの成立』（1957） を読んで

円尾 健

（1）

関西大学仏文科を退職してすでに六年目、月日のたつのは早いものである。その後、いつの間にか後期高齢者の仲間入りをし、現在に至っているが、それでも昔取ったきねづかというのか、その間に母校の京大仏文科の機関誌『仏文研究』に執筆する機会に恵まれて、リンダ・ノクリン『リアリズム』（1990年、ペンギン・ブックス）の書評を試みた。書評は三回に及び — 第37号（2006年）、第38号（2007年）、第40号（2009年） — 結果的に100枚を超す一大（！）書評と相成ったしだいである。ついながら、この作業を通じて単にリアリズムのみならず、もっと一般的に、この日本で外国文学、そして外国文化を研究することはいったいどういうことであるかを、あらためて考えることを迫られたのを付け加えておかななくてはならない。

ところで、こんど、『仏語仏文学』にあらためて寄稿するに当って、タイトルにかかげた作品を取り上げることにしたについては、若干の前置きが必要と判断して、以下に簡単に述べることにする。

40年という在職期間中に、主として個研費によって購入した大量の印刷物を何とか疎開させたものの、その後放置したままになっていたのを、老い先き短かくなった（！）現在、これまた何とか整理し処分する必要に迫られてその作業に取りかかっているところだが、その中で出くわしたのが、この渡辺一夫『フランス・ユマニズムの成立』（1957年、岩波書店）なのである。この、日本の仏文学界の大先達の一人については、すでに他にも若干の著作を所有しているものの（残念ながら、ほとんど —

御多聞に洩れず — “ツン読” に終わっているが)、実際にはいくつかの短かいエッセー風の文章に接しただけで、あとはほとんど無縁ですごしたというのが正直なところであり、またこの元東大教授の専門とするフランス・ルネッサンスについても、昔シュテファン・ツヴァイクの“Triumph und Tragik des Erasmus von Rotterdam” (『ロツテルダムのエラスムスの勝利と悲劇』) と、“Ein Gewissen gegen die Gewalt — Castellio gegen Calvin” (『権力に背く良心 — カステリオン対カルヴァン』) を読んだことがある。他は、目前の授業の必要を満たすだけの、ごく一般的な、教科書風の知識と認識しか持ち合わさなかったというのが実情である。そのようなわけで、こんど初めてフランス・ユマニスムについて本格的な基礎知識を授かったようなしだいであり、この労作の内容について論評するような資格は、もともとありはしないのだ。それでは「看板に偽りあり」ではないかと反論されそうだが、それには理由がないわけではない。

著者の渡辺は、冒頭に「小序」(1957)をつけていて、その中でこの著作の成立事情について次のように語っている。フランスの十六世紀語学・文学の一端に触れながら、その両面で新しい疑問や様々な問題に逢着し、それらを解決するために、少しでもこの時代を様々な角度から思想史的・文化史的・歴史的に眺める必要を感じて、1950年から1951年にかけて東大で「フランス・ユマニスムの成立」と題する講義を行ったが、その時の草稿から本書が生れることになった。「本来、私は単なるフランス・十六世紀語学・文学の鑑賞者の入門者にすぎず、思想史・文化史・歴史的な究明を十分に行う能力を持た」ず、それらの講義も、ノートを学生の便宜のために提供したにすぎない。堂々たる題を掲げながら、思想史・文化史・歴史・古典学の専門家の目からは、内容が貧寒で、欠陥だらけに違いない。「一介の十六世紀フランス語学・文学入門者」たる自分が読んだ研究書は「どうしても語学・文学方面に限られやすく、且つ古典やキリスト教や歴史に暗」くて、必要な名著を見逃がしているに違いないが、いずれ識者の叱正によって、正しい見地に立ちたい。

以上が、著者によれば、この『フランス・ユマニスム』の成立事情で

ある。今、手元にある年表を見ると、1950年は昭和25年に相当し、小生はまだ高校の一年生であった。朝鮮戦争が起きた年であり、前年には中華人民共和国が成立している。国内的には、今の自衛隊の前身、警察予備隊が設置され、前年には湯川博士が、日本人として初めてノーベル賞を受賞している。また翌年の1951年には、サン・フランシスコ講和会議、平和条約調印。日米安保条約調印。などとある。1956年には日本の国連加盟が成立、1957年（昭和32年）、当時のソ連の、人工衛星の打ち上げが成功している。小生も、その時にはすでに大学の四年であった。そうした時代環境が、そのままフランス文学研究に反映するわけではないが、それでも当時見聞したことを少し次に述べてみると、その頃、関大仏文の主任格であった三木治教授と話す機会があって、談たまたま渡辺一夫に及んだ時、教授が、「今、あれが仏文の世界で一番よくできるのではないかな」と云われたのを思い出す。それに対して、筆者が、「文明批評の能力では、桑原（武夫）さんの方が上ですけれどね」と答えたことも。ただし、そのころ、当方はほんの仏文の駆け出しであり、それに渡辺教授に直接師事したこともなく、また関心も別のところにあって、その仕事についてロクに知るところがなかったということをつけ加えておかねばならないが…

ついで思い出すのは、関大仏文の二年ほど上の、今は故人の卒業生で、東北大学の大学院を經由して、すでに母校で教員となっていた先輩のことである。かれは卒論でジョルジュ・サンドを取り上げ、その後も、この女性作家とまずは精力的に取り組んで、その結果を次々と学会誌に発表して一部では評判になっていたようである — というのは、当方はそのいずれも読んだことがなかったからだが。そして小生が、関大仏文の専任に採用されることになった時、三木教授が小生を前にしてその先輩の話をし、おそらくは新人にいわゆるハツパをかけようとしたのであろう、「Y君なんか、こんなに業績があるんだよ」と身振り手振り入りだったことを思い出す。もっとも、後にその先輩が、何かの機会に「ぼくはジョルジュ・サンド以外に、何も知らないんだけど」と洩らしていた

のを聞いている。ついでながら、その頃、関西の某国立大学の仏文科の主任教授が、学生に向って、「タクアンをかじってがんばれ！」とこれまたハッパをかけたとかいううわさを聞かされたこともおぼえている。

現代の日本は、明治維新、太平洋戦争での敗北に続いて第三の開国の時代といわれるが、それにならっていうと、今あの時代を振り返ってみて、その素朴リアリズムのというか、特攻隊を思わせるような、カミカゼ的なアプローチは第二の“フランス学事始め”とでもいえるような印象を持つのである。そういった状況の中で、上にその一端を見た渡辺の姿勢は、すぐれて自分の仕事に自覚的であったといってよいであろう。(渡辺の独特のパーソナリティー、とくにその有名な、時に誤解を生むような謙譲振りは、『渡辺一夫著作集月報』(1970年、筑摩書房)に寄せられた諸家の思い出や、『わが青春の渡辺一夫』と題する、教授死後の、友人、教え子による雑誌『文芸春秋』(1975年12月、文芸春秋社)での座談会などを読んででも明らかであり、そのことを十分考慮に入れるとしても)

ともあれ、渡辺の現状認識、ないしは反省 — 単なる十六世紀フランス・十六世紀語学・文学の鑑賞者の入門者(これは、ある時代を専門とする一介の語学教師と解してもよいのであろう：筆者註)であることと、それを越えて思想史・文化史・歴史的な究明を十分に行う能力を持つこととの相違、そして両者間の関係の認識 — は問題の根幹に触れるものだが、その自覚が、当時はもちろん、その後も広く共有されるようになったとは、とうてい云えないだろう。論より証拠で、限られた範囲ではあるが、四十年過ぎたこの仏文科で、そういったテーマが正面から取り上げられて論じられた記憶など、ただの一度もないのである。(一度だけ、学科主催のミニ学会でリアリズムについて報告を行った時、文化史的アプローチの必要に触れたことがあるが、そんなことをおぼえている人はもうだれもないだろう。)『フランス・ロマン主義と現代』(宇佐美斉編、筑摩書房、1991年)の序の中で、編者は日本のロマン主義研究について触れ、それがドイツやイギリスのそれと比べてかなりの立ち遅れを見せていることを指摘し、「特定の作家や作品に限定してこれを論ずる

専門研究は比較的さかんであるが、フランス・ロマン主義を統一的にとらえようとする（傍点筆者）試みはごく少数の例外を除いてほとんどなされて来なかったといわざるを得ない」と断じ、この欠如を補うのが先決問題であり、このような基礎作業の積み重ねなくして、定点をあいまいにしたままの観測では、豊かな成果は望むべくもないと主張する。これも、すでに指摘したことだが、何もフランス・ロマン主義に限ったことではなく、先に見た渡辺の自己省察につながる指摘といってよいだろう。

以上、ノクリンの『リアリズム』を書評する過程で抱いた感想に関連して、渡辺の労作を取り上げたゆえんである。ただ、渡辺の自己省察というか、自己認識は、ある問題をはらんでいることを指摘しておかねばならないだろう。問題に対して自覚的であるということは尊重されるべきだが、それだけにとどまるならば、問題を個人的なレベル — 個人の努力とか能力といった — に解消してしまうことになりはしないか、ということである。個人的な努力はもちろん行うべきだし、能力は高めるべきだが、これは、すなわち外国文学ないしは外国文化研究ということでは、少くとも日本人にとって、背後にもっとひろがりを持った問題ではないだろうか。というのは、上記の書評をおこなう中で、評者は次のように書いたことがあるからだ。

ところで、「リアリズムとは何か」というところから出発し、リアリズムをめぐる状況からそのあり方を探ってきた。今あらためて日本の近代化、西洋化、というものがそこにも反映していることを痛感する。いくなればわれわれの西洋理解のレベルと質が問われているのだ。

この問題はまた後に見ることにして、先に見たように、渡辺は「単なる一介の十六世紀フランス語学・文学入門者たる私」に対して、「思想史・文化史・歴史的な究明を十分に行う能力」を対置させているが、そ

れ以上、この問題の検討はおこなっていない。だが、もう少し論議を深めない生産的な議論は期待すべくもないのではないか。「一介の…」は、便宜上「一介のフランス語学教師あるいは文学教師」と読み換えても差し支えないと思うが、それでも話はそう簡単ではないだろう。たとえば、単なる語学、あるいは文学教師であれ、同じヨーロッパ文化圏に属する場合と、日本のように異った文化圏に属する場合ではよって立つ基盤が遅い、当然のことながら事情は違って来るからだ。そして、その語学あるいは文学教師は、いったい思想史・文化史・歴史的なアプローチとは、どうかかわりがあるのか？ともあれ、そういった基本的な問題を素通りしたままでは、充実した成果なぞ得べくもないだろう。

(2)

ところで、文学が語学、あるいは単にことばと切り離すことができないのは明らかである。そして、われわれの場合、対象となるのは、いうまでもなく外国語だ。その外国語と日本人の関係について、評者はかつて、『世界とのコミュニケーションは可能か』と題する小論を、当時の関大有志との共同研究で発表したことがある（『転換期の文化 — 日本近代化のひずみ —』中農晶三・竹内洋編、創元社、1979年に所収）。あれからすでに30年たった現在、読み返してみても基本的な認識は変わっていないし、また変える必要もないと思う。（というより、近代日本の文化構造が — 表面的な変化こそあれ — いささかも変わっていないのであろう）。その小論の全体をここに再現することはできないし、またその必要もないが、その骨子をごくかいつまんで述べておくことにしよう。現代日本をおおう、“外国語アニマル”とっていいほどの、異常な外国語熱と、外部世界 — 諸外国 — との深いコミュニケーション・ギャップに着目し、そのよって来たところを追求したもので、その中で私は、日本での、外国語、とくに英語をめぐる議論のあまりのノンキさに多少いら立って次のように書いた。

日本における外国語の問題は、実は地理的条件、遠くは蘭学にさかのぼる歴史的、文化的背景、近くは開国→明治維新という一大文化革命、さらに第二次世界大戦後は急激な西洋文化、特にアメリカ文化への傾斜などがからみ合った複雑な様相を呈していて、西欧諸国の間にはちょっと類のない特異な現象なのである。こういった複雑な性格をわきまえずにそれを恣意的に、または我田引水的に単純化し、あるいは一面だけを強調したり、または国際感覚の必要を得々として論じたところで百害あって一利なく、議論を前進させるどころか、その妨げとなるぐらいが関の山であろう。つまり、ことばだけを切り離して考えるのではなく、もっと広いパースペクティブの中で見るが必要となってくるのだ。

その際にも言及したように、英語学の市河三喜博士は日本人が外国語に不得意な理由として (1)日本語が、およそ外国語とは異質なことばであること (2)その困難を克服して習得したとしても、島国のため使う機会がないこと (3)日本人が、島国人種としてどちらかといえば人見知りし、消極的な人間であることの三つを、夙にあげていて、それはそのまま日本人の言語環境としてまさしく核心をついた指摘である。同時に、それは外国語学習の上で異常な困難、いや最悪の条件といってよいだろう。以上の事実を、筆者は40年間の語学教師としての経験から身をもって痛感し、外国語の勉強などというものは——とくに日本のような国では——だれにでもできるというようなものではないし、まただれもがやる必要のないものだということを、そしてそのことをわきまえず、猫にも杓子にも押しつけるのは社会的罪悪にも等しいという結論に到達したが、そういった状況が、この日本では明瞭には意識されず、また深刻な疑問も——一部の人間を除いて——見受けられないようである。(いや、それどころか、その後30年を経て、事態はますますエスカレートし、識者の警告やアドバイスなぞどこ吹く風と、小学生にまで英語を必須課目として強制しているではないか。) これは、歴史の皮肉というか、いたず

らとしかいう他はないが、それが、よくも悪しくも日本の近代というもののなのであろう。

その、日本の近代化の性格について、イギリスの社会学者ドーアほど、的確にして示唆に富む見方を提出した人はいないであろう。日本で明治時代に大学が作られて、あらゆる学問が日本語化されたことを、英語が用いられるインドの大学と比較して、ドーアは日本にとってプラスだったという。インドの学者は英語を使うから、言語的には英米の大学と同じ世界に住むわけであり、その業績は、常に英米の大学の業績と比較される。インド人でも、西欧の知的文化を三代くらいつづいて吸収している家庭に育った人間は別として、一代くらいで学者になった人間は、どんなに優秀でも欧米人とは対等に競争できるはずはない。しかし、同じ言語世界に住んでいるというために、何かにつけ比較され、劣等感を感じてみじめである。

それに反して、日本ではとにかくすべてを日本語化して、日本語という岸壁を島国のまわりにめぐらして、その中で自分たちの学問を作り上げていった。これがプラスの面であり、そのかわり、マイナス面としては、外の世界と直接交渉を持つことがなくなり、言語的、文化的弾力性が失われた、とする。

現代日本人の、外国語にたいする認識とアプローチはもっぱら、以上の事実根ざしていると思われるが、そのプラス面はともかくとして、そのマイナス面 — 実体を欠いた一方的な思い込みや議論の空転、さらに膨大なエネルギーの浪費などの、いうなれば文化的、精神的混乱 — は他ならぬ明治の開国の代償であり、それが現在にも及んでいるのである。

ここで思い出すのは、かつての仏文科での同僚、伊地智均さんのお兄さんで、元大阪外国語大学の中国語科の教授を勤め、後に学長になられた方が、かつて「毎日新聞」の文化欄に載せられたコラムのことである。ちょうど大学紛争の最中のことで、激務のかたわら、よく書かれたものだと思うが、その中の一つに次のような文があったのを記憶しているの

である。ある時、旧知のドイツ人の言語学者が訪ねてきて、いろいろ話していった中で、そのドイツ人は日本人の外国語について触れ、「どうも日本人は、外国語というものがどういうものか、その勉強がどういうものか、よく分っていないようだ」という意味のことを述べたという。そして、評者はそれに心から同感するのである。

ともあれ、最初にあげたように、『フランス、ユマニズムの成立』の著者は自身のことについて、繰り返して単なる一語学生、単なる一語学教師と規定しているが、それはもちろん謙遜としても、その語学生、語学教師という仕事は、本来、以上に検討したような大きな問題をはらんでいるのだ。もちろん、時代と共に客観的条件も変化し、とうとうたる国際化と共に、日本人の言語環境が変って来ているのも事実である。とはいえ、すでに見た、市河博士のあげる日本の基本的な言語環境が — 遠い将来はともかくとして — そんなに簡単に変わることはあり得ないだろう。そういった、いわゆる“ことばの壁”を乗り越えるには — 乗り越えられるとしての話だが — 、自分のおかれた客観的条件を正しく認識することから始めることが、そこに到達する一番の近道であることだけは確かなようである。

(3)

さて、次に同じ著者が、「単なる一介のフランス語学・文学入門者」に對置させている思想史・文化史・歴史的な究明を十分に行う能力」という問題に移ることにしよう。思想史・文化史・歴史的アプローチ — と口でいうのは簡単だが、それは具体的には何を指し、一介の語学教師といかなる関係にあるのか。その点について、著者は「私の読んだ研究書は、どうしても語学・文学方面に限られやすく」且つ、私は「古典やキリスト教や歴史に暗い」と告白し、さらに「結語」においても、同様に「私はキリスト教全般について、旧教の神学、新教の神学その他について、全く無智であるといってもよいし、ギリシャ・ラテンの古典にも甚だ暗い」ので、中世やこの時期の作品は、「主としてフランス語訳で読む

より外にいたし方なかった」と記している。これは著者一流の、有名な――時には過度と映る――謙遜癖のあらわれだとしても、その切実な本音と見てもさしつかえないだろう。なぜなら、日本のフランスの十六世紀文学の研究者で、キリスト教全般に明るく、かつギリシャ・ラテンの古典にも精通している存在などというのは――現在でもなお――実際には、まず考えられないからである。それでは、十六世紀ではなく、現代、もしくは現代に近ければ作業はもっと楽になるのだろうか？

これも、すでに初めに紹介したことだが、『フランス・ロマン主義と現代』（1991）の編者は日本のロマン主義の研究の現状について、そのかなりの立ち遅れを指摘し、個々の専門研究は比較的さかんに行われていても、フランス・ロマン主義を統一的にとらえようとする試みは、ごく少数の例外以外はほとんどなされて来なかったと断じ、このような基礎作業をあやふやにしたままでは、まともな成果は望むべくもないとする。ここで編者の“統一的にとらえようとする試み”という表現に注意しよう。それが、渡辺のいう「思想史・文化史・歴史的な究明」と重なり合うかどうかは別として、問題の提出の仕方は同一線上にあるとってよいだろう。さらに、この文脈でぜひとも言及しなくてはならないのは、すでにノクリン『リアリズム』の書評で引用した、作家にして批評家、かつ大読書家であった故中村眞一郎の発言であろう（季刊『文学』、第七卷第4号、岩波書店、1996年秋）。この「21世紀の日本の教養にむけて」と題するインタビューで、中村は日本の近世知識人と近代知識人との違いから説きおこして近代日本文化について論じている。近代に入って、必要に迫られたにしろ、日本は西欧から、法律にしろ自然科学にしろ、目先の出来上ったものばかりもらって来て学問をはじめた。文学においても同様で、そこからその根無し草的性格が生まれてくるが、一方、ヨーロッパではゲーテのギリシャ的教養にはじまり、すぐれた作家たちはローマ以来のラテン語の世界から養分を得て創作している。ジョイスにしても、その実験はまるごとギリシャの古典に拠っていることは周知の事実である。「シュールレアリズムでも、いきなりシュールレアリズムと

いうことはあり得ない」(傍点筆者)。サルトルにしても、プラトンなどを読んで、それで近代の問題にぶつかって自分の哲学を展開したわけだが、日本ではサルトルを輸入したころから、いきなりサルトルを論じている。その自己形成を迫体験せずに、思想家を論じて、基礎が不安定だと身につかないだろう。「ある思想家がいきなりその思想家になるなどということはあり得ないことだから」(傍点筆者)。

以上、「思想史・文化史・歴史的」アプローチとは何かという問題について若干の考察を試みてきたが、それが、多少とも明らかになったと考える。思想史・文化史・歴史的アプローチといっても、ごく単純にして素朴なレベルでは、ある作品を論じたりする場合、その背景——時代背景や成立事情など——を簡単になぞることぐらひはふつうに行われているし、だれでもやっていることだが、ここで問題となっているのは、そんな、ありきたりの文学史に載っているていどのレベルのものでないことはもちろんである。さらに明らかになったのは、日本では、対象が渡辺の専門とするフランス十六世紀であれ、ずっと下って近代であれ、個別的な専門研究は比較的さかんであっても、全体を思想的・文化的・歴史的観点から、あるいは総合的にとらえようとする関心も試みもとぼしいということであろう。

それでは、そういった観点を欠く場合、どういうことになるのだろうか。次に問題をもう少し具体的に検討してみよう。まず、身近な日本史に、ちょうどふさわしい例があるのでそれに即して考えて見ることにする。『歴史よもやま話——日本篇・上——』(池島信平編、昭和41年、文芸春秋社)は、もとはNHKのラジオ番組で、作家や評論家に専門の学者の座談会より成るが、その中に「大仏開眼」という一篇があり(参加者は、当時の東大寺勸学院院長、歴史学者の家永三郎、批評家の亀井勝一郎)、そこでは大仏をめぐる、八世紀の日本人の生活に関する興味深い事実が取り上げられて論じられている。談は聖武天皇と光明皇后に及び、その当時の背景に言及した上で、家永は、一般論として、古代の仏教史の最後には、血みどろの、人間の権力争いが横たわっていることを指摘

する。一面非常に華やかな、七世紀から八世紀にかけての白鳳天平の仏教文化の発展の裏には、そうした実に悲惨な事実がいくつもある。であるから、その時代の全体を見るためには — と家永は続けていう — 東大寺などに今も残っている仏教美術の美しい世界と、香り高い万葉の世界と、『続日本書紀』に展開されている血みどろの争いの世界と、

全く違ったグループの資料でバラバラになっている時代のイメージを一つにまとめて、八世紀の全体像を組み立ててみる必要があります。その作業をやらなくて、どれか一つの資料のグループだけを見て、これが八世紀の日本のすがただと思うと、たいへんな間違いになると思いますね。

スペースの関係で、例はこの一つだけにとどめておくが、全体を統一的にとらえるということが、あるいは「思想的・文化的・歴史的に究明する」ということがどういうことか、これ以上説明する必要はないだろう。

ちなみに、評者はべつに日本史を専攻する人間ではないので、以上の問題が、現在どのように扱われているかは知らない。だが、足元の、自国の歴史の基本的な事実でさえ、総合的な、統一的な視点を欠くと、“たいへんな間違い”をやらかす可能性があることを、上の指摘は教えている。それが、少なくとも自国のそれほどにはよく知らない外国文学・あるいは外国文化研究の場合、“たいへんな間違い”を犯す危険がさらに増すことは否定できないだろう。

それでは、次に本来の領域たる外国文学 — フランス文学 — で検討を続けることにしよう。

十六世紀フランス文学の研究者たる渡辺一夫は、謙遜からとはいえ、時代を総合的に究明する能力に欠け、頼る研究書はしょせん語学・文学中心であり、且つ古典やキリスト教や歴史に暗いことを嘆いている。ま

さにないないづくしであるが、すでに見たように、近代の研究者にも、さまざまな問題が待ちかまえていることも事実である。もちろん、この小論ですべてを取り上げることはできないので、リアリズム中心に二三の例で見ることにしよう。

「Ⅱ レアリズムから自然主義へ」の章の、「リアリズムの時代」（フランス文学講座2『小説Ⅱ』、昭和53年、大修館書店）の中で、執筆者の斉藤昌三は型通り時代背景などに触れたあと、「科学と実証主義」において、自然科学の著しい発展が後者を時代の哲学に押し上げて、リアリズムや自然主義の理論的支柱とした、とする。このようにして実証主義は十九世紀後半の文化領域全般に強い影響を与え、文学も科学の方法に左右されるにいたる。かかる環境の中で、バルザックもジョフロア・サン・チレルの動物分類学に影響され、そこから『人間喜劇』の構想を得るのは、その序文にある通りだが、同様の怪しげな「科学的方法」によって人間動物学を書こうという試みは三十年代ごろ盛んに行われたのである。ゾラも、バルザックの影響下で『ルーゴン・マカール』を書くことになる。いかにも幼稚なやり方によるとはいえ、「科学的方法」の応用という点でもバルザックはリアリズムから自然主義への流れの先駆的存在であろう云々。

ここでバルザックは、一方的に、“怪しげな”「科学的方法」とやりに手を出し、“いかにも幼稚なやり方で”それを応用しようとした、いわば流行の時代思想に踊らされたピエロのように扱われているが、果してそうだろうか。こうした捉え方は、この日本では必ずしも珍らしくないのではないかと思うのでいうが、名著、H・バターフィールド『近代科学の誕生（下）』（渡辺正雄訳、講談社学術文庫、1993）の第十二章「進歩の思想と進化の概念」を読んだ人間は、この、ルネッサンスからダーウィンに至る進歩と進化の思想の流れの中で、バルザックが— 多少の誤解や行きすぎはあったにしろ —むしろ正統的な立場に立つ人間であったことが分るだろう。そんなことを考えてみようともせずに— それこそ「思想史的・文化史的・歴史的」に見る必要なぞどこ吹く風と—上

っ面だけを眺め、一方的に「怪しげな」とか「いかにも幼稚な」とか烙印を押して切り捨てて得々としているのなぞ、無知蒙昧の見本と評されてもしかたがないだろう。それとも、それは、しょせん明治の開国まで近代思想の流れと無縁であった国の、それも文科系の人間の限界なのだろうか。

生島遼一『フランスの小説』（河出書房、昭和30年）はフランスの小説を近代から現代に至る大きな流れの中で統一的に捉えようとした、小説の試みの一つであって、それぞれの局面についても教科書風を脱した、エスプリある、シャープな分析をほどこした貴重な論集であるが、その「現代フランス小説」という章の、「1. 19世紀リアリズム」の中で、フロベールの、ラマルチヌの小説『グラジェラ』を論じた手紙（1852年、ルイズ・コレ宛）が、そのような詩人の空想と感傷から生れた作品を生み出させたロマン主義に対して、リアリズムの決定的な誕生を告げる証拠としてあげられている。ふつう、リアリズムとロマン主義はおたがいに相対立するものと考えられていて、上の例なぞは、その違いを説明するのにのってこのケースだろう。だがよく見ると（思想史・文化史的・歴史的に見ると！）、問題はそれほど簡単でもないようだ。かって、フランス・ロマン主義絵画の旗手テオドール・ジェリコーを中心とする、ロマン主義の展覧会が日本で開かれた時、評者が感じたことは、『リアリズム』の書評でも触れたが、とくにジェリコーが、有名な『メデューズ号の筏』（1819）の制作に当って見せた精力的な動きは、こちらの漠然とした、伝統的なロマン主義観をはるかに越えているということだった。作者はかろうじて生き残った乗組員の話をもとに、実際にアトリエの中に同じような筏を作り、またパリの屍体収容所に通って死体の研究をしたという。このことを知って、評者はフランスのロマン主義と、後のリアリズムや自然主義とどこが違うのか、本質的には同じものではないかと考えたことを思い出す。もちろん文学と絵画という、ジャンル上の違いによって現れ方に違いがあるのは当然であるが、すでに十九世紀の初頭

十分注目に値することであろう。その後、評者はこの問題について、『リアリズム』書評を通じて若干の考察を試みたが、その中で考えたのは、西欧のリアリズムは、その長い知的伝統に深く根ざした、近代西洋特有の産物であって、日本人がそれを「写実主義」と訳して理解しているものとは違うのではないかということであった。

おわりに

以上で渡辺一夫著『フランス・ユマニズムの成立』の書評を閉じることにするが、最初にことわっておいたように、内容そのものよりも、著者の、研究の方法論をめぐって議論を展開することになって、かなり変則的な書評となったことを認めざるを得ない。というのも、これもすでに述べたように、ノクリン『リアリズム』の書評を終えたばかりであり、外国文学・文化研究のあり方について考えを巡らせたところであって、著者の渡辺の、自己の仕事というか、役割についてすぐれて自覚的な姿勢に共感を持ったからである。

渡辺の自覚的な姿勢とは、何度も言及したように、「一介の、フランス語学・文学の入門者」的研究者・教師 — 自分も属する — と、思想史・文化史・歴史的探求を行う能力という二つの立場の区別であって、そのおのおのについて評者は若干の検討を進めて来たが、今いえることは、両者は本来、相補う関係にあり、いふなれば部分と全体の関係に比せられるということだ。部分を抜きにして全体は存在しない。その関係が、部分とはともかくとして全体が見失われていることに問題の根があり、『フランス・ロマン主義と現代』の編者の指摘 — わが国では、個別の専門研究は比較的さかんだが、ロマン主義を統一的に捉えようとする試みはきわめてとぼしい — や中村眞一郎の、わが国の現状に関する意見も、まさしくそこから来るのだ。

世界の名著シリーズ8『アリストテレス』（責任編集 田中美知太郎、中央公論社、昭和53年）の解説「アリストテレスの思想と生涯」で、編者は日本でのアリストテレス理解に言及し、それがまだ「発展途上」に

あることを指摘している。そしてアリストテレスを長い歴史の連鎖の中に位置づけ、その理解のためには世界の思想史の大きな枠組みを作ったギリシヤ哲学全体の流れの中で理解する必要を説いているが、その中で、わが国のこれまでの哲学や思想の理解の仕方について、「ヘーゲルとかカントとかいうものを、他との関連から引きはなして、いわばダルマが面壁何年かするような流儀で、書物とにらめっこして、そこから何かを悟ろうとするようなものが多かった」と述べている。そして、アリストテレスの新しい歩みの意味を論じていう。「日本の哲学が始まってからようやく百年が経過したけれども、その間にいったい何を学んだのか」。このように見て来ると、問題は何もフランス語学・文学の研究だけに限ったことではないことが明らかであろう。問題は日本の近代文化全体にかかわることであって、あらためて日本の近代化、あるいは西洋化といわれるもののレベルが問われているとってよいだろう。

以上見てきたような文化状況は、次のようにたとえられないだろうか。ヨーロッパという、壮大な壁画がある。近代日本人は、おおむねそこから自分に必要なものや自分に気に入ったものだけを取り出して、一心不乱にいじくり回すのに終止している（とうとうたる専門細分化の波が、それを加速する）。本当は、それを元の場所にもどし、全体の中でその位置をあらためて確認するという作業が残っているのだが、それはほとんど行われていない。それは怠慢によるのか、それとも日本のような後発国の宿命なのだろうか。

ともあれ、『フランス・ロマン主義と現代』に見るような新しいアプローチも現われ、そういったヌーベル・ヴァーグに期待する他はないが、文脈は違うにしろ、もともとペンギン・ブックスの一冊であり、小生が書評を試みた『リアリズム』の著者リンダ・ノクリンは「文化や伝統の既成概念の枠組み見直しの先陣を切って」いて、もともと芸術史を専門とするが、それ以外に“思想史・文化史・歴史的”観点に立ち、いうなれば、「通常の文学史や美術史のわくを越えて」研究を展開していて、その仕事は必ずやわれわれの進路にとっても大きな参考となると考える。